

まちづくり通信

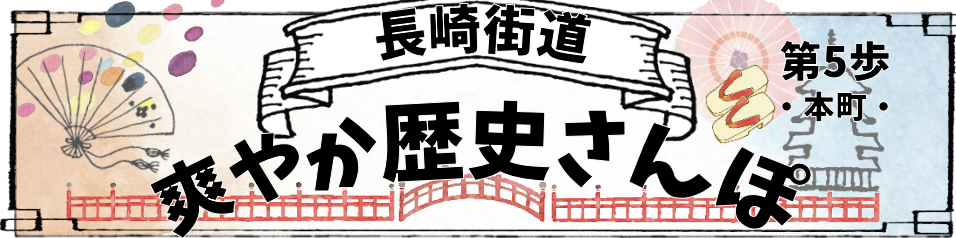
第 109 号



いよいよ
10月16日
(日)
9時集合

秋の爽やか北さんぽ

3年振りの開催となる「長崎街道まつり」に合わせて、鳥栖北地区まちづくり推進協議会では「秋の爽やか北さんぽ」と題し、鳥栖北小に通うお子さんを持つご家族を対象に、長崎街道をめぐるウォークラリーを開催します。参加要項チラシは鳥栖北小学校に配布しています。参加予定の皆様、ぜひ楽しんで下さいね！



第5歩

・本町・

長崎街道とは江戸時代に長崎と小倉を結んだもので、別名シュガーロードとも呼ばれ、宿場町などがあつた場所です。鳥栖地域の田代・轟木宿にもオランダ使節のカピタン（商館長）行列や、任務のため往来する長崎奉行・幕府役人やあるいは商人などが盛んに往来・宿泊していました。

博多屋（徳淵家）



売薬制度が発足した1780年代、対馬藩田代領における売薬人は50人ほど、幕末期には80人ほどいたようです。

発足時は村にいた売薬人も、後には代官所の命で町へと移り、とりわけ瓜生野町へ配置売薬業を営む人々が集まってきました。博多屋の屋号をもつ徳淵家もその内の1軒で、現在に残る家屋は明治22年（1889）に建てられています。間口も広く立派な土塀と門をもち、売薬業の繁栄ぶりを示す広大な建物です。

古賀家



古賀家は江戸時代、田代官所の役人で、瓜生野今町の町役も兼ねていました。南門は役人としての出入口で、

玄関には式台があり、北門は地主としての出入口で、米や農産物を運ぶ荷車がそのまま通れて米蔵・みそ蔵や蚕蔵に通じる造りになっていました。母屋は、文化文政期（1820）から幕末（1860）にかけての建築と伝えられています。



松本家



昔、松本家は造り酒屋でしたが、ある時期、家業を分家の「みやき酒場」に譲ったと伝えられています。母屋の建物は、

天保7年（1836）と棟木に墨書で残っています。座敷は大正10年（1921）頃の改築、離れは戦後の建て増しと伝えられています。土蔵やみそ蔵は明治14年（1881）頃の建築で、母屋の1階は格子戸、中2階は白壁造りで当時の雰囲気を残しています。格子戸の柱には馬留環が当時のまま残っています。白壁の米蔵の門は間口も広く軒高も高く荷物を積んだ馬が出入りできるようになっています。



吉竹家



吉竹家は「油屋」を屋号とし、江戸時代に筑後から移住し、筑後平野から菜種を仕入れ、菜種油の製造・販売と問屋を営み

250年以上続きましたが、戦時中に産業統制や原料の入手が困難となり、廃業したと伝えられています。母屋の建替えは棟札に明治26年（1893）とあり、通りに面した北にある大正7年（1918）建築の「離れ」には、客人用の式台がある玄関がつくられています。別棟の職人・従業員用の宿舍もありました。

次回は
秋葉町・西町です

